



TITLE:

排除説と補償説

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

CITATION:

穂積, 文雄. 排除説と補償説. 經濟論叢 1958, 82(2): 102-116

ISSUE DATE:

1958-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/132634>

RIGHT:

經濟論叢

第八十二卷 第二號

日本經濟と纖維産業（特に綿業）

.....植 場 鐵 三 1

排除説と補償説.....穂 積 文 雄 14

炭鉱國家管理における炭価・資材政策の検討

.....岡 田 賢 一 29

再生産の共通法則と經濟的範疇.....長 砂 実 45

書 評

重農主義研究の問題点

——横山正彦著『重農主義分析』批判——

.....河 野 健 二 59

昭和三十三年八月

京 都 大 學 經 濟 學 會

排除説と補償説

穂 積 文 雄

一

機械は生産力を増大する。それは、機械は労働力を節約する、ということにはかならない。ということは、機械は人力にとって代わる、ということである。したがって、機械は労働者の職をうばい、労賃をうばい、パンをうばう、と説かれる。いわゆる排除説（解放説）がこれである。それは、ふるくからある。たとえば、こういふはなしがつたへられてゐる。ある發明家がコルベール（Colbert）に十人分のはたらきをする機械を提案した。「余は」とこの高名の政治家はこたえた。「民衆をして、じぶんの仕事（travail）で正直に生存せしめることに意を注いでいる。それなのに、汝は、かれらから仕事をうばう手段（les moyens）を、余に提案しに来るのか！。よそにもつて行け。」と。メキシコの大統領サンタ・アンナ（Santa-Anna）についても、これとおなじようなはなしがつたえられてゐる。ある人が、かれに、ベラクルズ（Vera-Cruz）とペロテ（Perote）の間に鉄道を敷設することを建議した。「君は」とかれはこたえた。「余に、驢馬引きと驢馬をどうさせようとしたいのか。」と。かくて、ビュレ（Buret）マルサス（Malthus）バートン（Burton）リカード（Ricardo）ルモンテイ（Lernontey）シスモンディ（Sismondi）ブルードン（Proudhon）等々、多くの論者をこの説の懷抱者の中にふくめることができる。特にマル

クス (Marx) は鉄中の錚々たるもの、その名をここに逸するわけにはゆかない。けだし、マルクスの資本家的経済体制の自己崩解の論理は、究極において、つぎのごとく展開する。資本家的生産方法は利潤の追求においてなりたつ。利潤は剰余価値に淵源する。剰余価値の追求は絶対的剰余価値の追求より相対的剰余価値のそれに進む。相対的剰余価値の追求は資本の有機的構成の高度化を媒介し、それを不可避とする。資本の有機的構成の高度化は、やがて生産の機械化にはかならぬ。かくて、産業豫備軍が増加し、大衆の窮乏化を来たし、購買力の不足を生じ、恐慌への行進曲が奏せられ、資本家的体制の吊鐘が鳴る。そして、この一連の論理の展開における、枢軸は、実に機械が労働者の職をうばう点にあると、みることができるところである。

二

機械は労働力を節約する。機械は人力にとって代わる。だから機械は労働者の職をうばう。論理きわめて明白である。明白すぎて異論をさしはさむ余地などありようがない。そうかんがえられよう。しかしながら、はたしてそうであるか。一八世紀の末期、イギリスにおいて、紡績機の導入が多くの紡績工の職をうばった。しかし、紡績機の導入は織布に活気をあたえた。そこで、紡績においてその職をうばわれた紡績工たちは織布においてその職を得た。この場合、機械が労働者からその職をうばったといえるであろうか。そればかりではない。パッシイ (Passy) は機械が導入せられて雇用が増大することをつぎのごとく指摘する。

「イギリスにおいて、ハーグリブスおよび阿克ライトの発明によって、綿業に機械を使用することがはじまったのは一七六九年ころである。それ以前には、この国には、ちいさな紡車の紡績女工 (Spinnets) 五、二〇〇人、織布工 (Weavers) 二、七〇〇

○人、合計七、九〇〇人の労働者と算定せられる。その後二十年と経たぬ一七八七年、アンケートが行はれた。それは、紡績工一〇五、〇〇〇および織布工三四七、〇〇〇、計、三五二、〇〇〇人の労働者の存在を確認する。急速な簡易化にもかかはらず、というよりも、むしろこの簡易化の故に、人数はかえって急速に上昇した。一八三三年にはその数四八七、〇〇〇に達した。根幹産業にツル織 (tulle) 捺染 (l'impression sur étoffes) 等の枝葉産業を加えると、それは八〇〇、〇〇〇に上ほる。……附随ならびに根幹産業に雇用せられた人数、王国の綿業に直接間接に従事するものの数は、商業辞典⁷⁾では、実に、凡そ二〇〇〇、〇〇〇という大きな数字である。「この王国の全人口の十四分の一になんとする。」そして、今日までの不斷の増加が、おなじく、そこ (訳者註、商業辞典) にまとめられる。」

そして、機械がいかに生産力を増進し、生活を豊富にし、よって、人類の発展に貢献したかを示し、排除説にもとづく機械呪詛の言辞に対して、つぎのごとくまくしたてる。

それは、小麦粉が減るのは小麦の収穫が増えるからだ、パンがへるのは粉を挽くことが上手でむだなくやれるからだ、炉がよくなり、数もふえて、より大規模に鉄を製造するから鉄が減る、より多くさん採掘して運搬するから燃料がすくなくなる、人手で苦勞して写本しているのに、印刷所が本を何千と出すから本がすくなくなる、ありとあらゆる貨物がへるのは船舶、運送手段ならびに交通路がふえて、各地から一層迅速豊富にもたらすからである、おわりに、衣類がへるのはつかれを知らぬ機械 (machines) が、間断なく、量をふやし、質を改めることに従事しているからだ、ということになる。それは、貧乏人の押入れにまで、敷布・シューミーズ・ハンカチーフがあるよりは、アンリ二世の時代にも、まだ貴族がしたといはれているごとく、袖で涙をかみ、中世ほとんど一般にそうであつたように、リンネルなしで済ます方が、よいということになる。それは、一七六七年のならはしのごとく、平均して木綿を一デシメートルもつ方が、今日のように、一乃至二〇メートルもつよりもよ

く、また、ルイ十五世の治下におけるごとく、インド更紗が一オーヌ(aune)一ルイ(Louis)で売られ、公爵夫人の粧ひに充てられるを見る方が、それが何スウ(sous)かの値段で、きわめてつましい主婦を被ひ粧うを見るよりも、よい、ということになる。そして、それは、要するに、いたる所で、工場や仕事場があらゆる種類の製品を、きそつて、世間に送り出すのは無益である、ということになる。⁸⁾

かくて、機械は労働者から仕事をうばうものではなく、かえつて仕事を与えるものである、と説かれる。いわゆる補償説⁹⁾がこれである。この派に属する論者は非常に多い。われわれはシャプタル(Chaptal)バステア(Bastiat)セイ(Say)等々枚挙の煩にたえぬ。ただし、一口に補償説といつても、その立論のしかたは、かならずしも一樣ではない。しかし、その種々相については、かつて述べたことがある。¹⁰⁾それで、ここにその一々について、ふたたびくりかえすことはさしひかえる。その代わり、そのもっとも基本的、かつ、代表的とみることのできる二つのものをあげることとする。

その一つは、シャプタルのそれである。いわく。

不明の徒はつねに、機械を採用すると工場にやとはれている多くの労働者が職をうばわれる、とおそれる。鋲や印刷術が発明せられたときにも同じおそれが抱かれたものである。しかしながら、技術(art)の起原に逆つて現在までの発展をたどるとき、人の手は、たえず、すこしずつ改良せられてきた機械を具備していたこと、産業の繁栄は、つねに、それらの改善に応じて来たことを知る。その理由は、機械は人力の価格を減ずることによって、生産物の価格を引き下げること、安い価格によって消費が増大し、その増大の進行は腕の減少のそれよりも大であること、また、生産物を増加させることによって、多数の部分的仕事を

発生させ、それらの仕事は人力を要求し、多数の腕をやとうことができるが、それは機械がなく、勢い、規模の小さい工場によく及ばぬところ、であること。¹¹⁾

その二は、バスチアのそれである。かれは、右のシャプタルの論理をとらぬ。かれはいう。

人はいう。機械は生産費を減じ生産物の価格を低下せしめる、生産物の低価は消費の増大をうながし、消費の増大は生産の増大を、そして、ついに、発明後も、発明前におけるとおなじだけの、あるいはより多くの、労働者の参加を必要ならしめる、と。人は論拠として、印刷術、紡績工場、圧搾機を引く。

だが、この証明は科学的でない。

もし、当該生産物の消費が不変であるか、あるいは、ほとんど不変であれば、機械は労働を妨害すると結論しなければならぬ。——それは事実でない。

一国内のすべての人が帽子をかぶると仮定せよ。もし、機械によって、帽子の価格を半額とすることに成功しても、帽子の消費が二倍になるとはかぎらない。

人は、この場合、国民労働の一部が癡痺にかかった、というであろうか。俗論によれば、然り、である。私見によれば、否、である。なんとすれば、この国で、たとひ、人がもう一つだけの帽子を買わないとしても、労賃の総基金は依然として、無事にのころう。帽子製造業にはいる金はへるが、その金額はすべての消費者によって実現せられた節約の中にみいだされる。そして、そこから、出て、機械が無用に化せしめたすべての労働に給料を与える。そして、あらゆる産業の新しい発展をうながす。¹²⁾

それでは、バスチアの補償説はいかにあるか。それは右の引用文の末句にうかがうことができるかともおもうが、

さらに、立ち入つて、かれがくわしく説くところをきこう。かれはいう。

ジャック・ボノームは二フランをもつてこれまで二人の労働者をやとつていた。

だが、いまや、かれは、綱索と分銅の設備 (*arrangement du corde et poids*) を考案する。そして、その設備は労働を半減する。

そこで、かれは(以前と) 同じ満足を確保し、一フラン節約し、そして、一人の労働者を解雇する。

かれは一人の労働者を解雇する。それは「眼に見えること」(*ce qu'on voit*) である。

そして、これだけをみて、ひとはいう、「このとおり、文明は貧乏をともなう。このとおり、自由は平等に対して致命的である。人智が一つの勝利を博すると、たちまち、一人の労働者が永遠に貧困の深淵に陥ちいる。しかし、ジャック・ボノーム氏が依然として二人の労働者を働かせて行くこともありうる。だが、かれはかれらに一人あて一〇スウ以上はあたえないであろう。なんとすれば、かれらは、互互に競争し、値下げしようと申し出るであらうから。かくて、富めるものはますます富み、貧しいものは、いつも、いよいよまづしくなる。世直しをせねばならぬ。(*il faut refaire la société*)」と。

みことな結論、序説にふさわしい！

幸なことに、序説も結論も、みな、これ、誤謬である。けだし、「眼に見える」現象の一面の裏に、「眼に見えぬ」(*ce qu'on ne voit pas*) 他の一面があるからである。

ひとはジャック・ボノームによって節約せられた一フランおよびこの節約の必然の諸結果を見ない。

ジャック・ボノームは、かれの発明の結果、既定の欲望追求のため、人力に対して一フラン以上は支払わない。故にかれには他の一フランが残る。

そこで世の中に、遊んでいる腕を提供する労働者が一人居るならば、世の中には、遊んで居る一フランを提供する資本家が一

人居る。この二つのものは相会し相結ぶ。

労働力・労賃の需給関係が何ら変化してないことは、日のごとくあきらかである。(il est clair comme le jour.)

發明と、第一のフランで支払われる一人の労働者は、いまや、かつて二人の労働者が成就した仕事 (l'oeuvre) をやる。

第二のフランで支払はれる第二の労働者は一つの新しい仕事を実現する。

そこで、世の中に、いかなる変ったことがあるか？ 国民の満足が一つふえてゐる。他のことばでいえば、發明は人類にとつて、一つの無償の獲得物、一つの無償の利潤 (un profit gratuit まるもうけ) である。¹⁰⁾

三

排除説は、機械は労働者の職をうばう、という。補償説は機械は労働者の職をうばわぬ、いな、ふやす、とさえいう。両説はまったく相反し、相対立する。いづれかの一方が正しければ、いづれかの他方が謬りてなければならぬ。それでは、いづれが正しいか。いづれが謬りか。それが問題でなければならぬ。しからば、問題を解決する鍵はいづこに求むべきか。それは事実の中に求められねばならない。なんとすれば、これらの説は事実を究明するためのものである。事実¹¹⁾に反することはすなはち謬れる所以である。事実¹²⁾に裏付けられることはすなはち正しい所以である。しかるに、二者はいずれも、事実¹³⁾に裏付けられてゐる。排除説を裏づける事実¹⁴⁾はラダイツの事件をかえりみれば思い半ばに過ぎるものがある。補償説を裏付ける事実¹⁵⁾は、さきにふれたところよりもあきらかである。しからば二者はいづれも正しいとせねばならぬ。相反し、相対立する二つの説が、二つながら、いずれも正しいとはいかなることか。そのようなことがありうるものか。といったところで、正しいものは正しいもの

である。それでは、それは、どうして、そうなのか。それは、それらの説が正しいとせられるかぎりにおいては、それらの説は実は相反し相対立していないからである。排除説が「機械は労働者の職をうばう」というとき、それは、機械が採用された生産部面における労働者の職をうばうことを意味する。部分についていうのである。補償説が「機械は労働者の職をうばわぬ、いな、ふやす」というとき、それは、社会全体をみていうのである。排除説は全体についていっているのではない。補償説は部分についていっているのではない。二者は観点を異にする。同じ観点からいっていない。機械が導入せられた生産部面についていえば、補償説も、機械が労働者の職をうばうことを否定するものではない。だからこそ補償説の名をもつてよばれることができる。そうでなければ補償説の名に値しないはずである。一方にうばうからこそ、他方それに対する補償がなりたつ。そのかぎり、補償説は排除説の肯定の上になりたつといつてよい。もつとも、前述のシャプタルの説の前半は機械が導入せられる生産部面において機械が労働者を排除することを否定している。しかしながら、そのことは、そのかぎりにおいては、シャプタルの説はことばの真の意味における補償説でない、ということを意味するだけのことである。かくて、排除説と補償説はいづれも正しい。二つながら正しい。二者は両立する。

わたくしは、排除説と補償説はいづれも正しい、二つながら正しい、二者は両立する、といった。しかしながら、それは二者が、おのおのその観点をことにしているからである。排除説は部分を見ていい、補償説は全体を見ていっていると解して上のことである。二者がそれら、それぞれの限界にとどまり、敢て他方の領域を侵かさないという、前提の下におけるはなしである。二者がそれらそれぞれの限界を越えればはなしはまた別である。排除説が、その、機械が導入せられる生産部面という、限界を越えてその主張を社会全体にまで拡大すれば、補償説と相反し

相對立する。この場合補償説は自己の限界においてある。だから、補償説は正しい。しかる以上、排除説は謬りにおちいる。正しくないことにならねばならない。同様のことは補償説についてもいえる。補償説が、その社会全体において見るといふ限界を越えて、その主張を機械が導入せられた生産部面にまで及ぼせば、排除説と相反し、相對立する。この場合、排除説は自己の限界内においてある。だから、排除説は正しい。しかる以上、補償説は謬りにおちいる。正しくないことにならねばならない。したがって、二者は、おのおのその分をまもらねばならない。その限界にとどまらねばならない。補償説は機械の導入せられた生産部面においては排除説のなりたつことを肯定しなければならぬ。また排除説は、社会全体についてみる場合補償説のなりたつことを、否定してはならない。補償説論者が排除説を肯定していることは前述のごとくであるが、排除説論者もまた補償説を肯定していることを指摘することができる。たとえば、われわれは、排除論者のリカード¹⁵⁾、その流れを汲むミルが、社会全体についてみる場合敢て、排除説をつらぬかんとせず、むしろ補償説を信念とするをみる。排除説のもつとも偉大な学者の一人を、わたくしはマルクスにおいてみるのであるが、そのマルクスもまた、いろいろの場合に補償説のなりたつことを示している。それは、実に、普通の補償説論者が示す以上でさえある。¹⁶⁾

しかしながら、排除説論者、補償説論者が、かならずそれぞれの限界にとどまるとはかぎらない。たがいに相手方を肯定するとはかぎらない。往々、その限界をこえて相手方を否定せんとする。しかしながら、その場合、われわれは、かれらが論理の飛躍をおかすのをみないわけにはいなくなる。たとえばマルクスをみよ。かれは、補償説のなりたつケースをたくさん示しながら、それらをもって、単に一時的の現象とする。かれの労働預備軍の理論は、かれにおいては、補償説の否定の上になりたつものといえる。なるほど一方に機械化が進行し、同時に、他方

では産業預備軍が増大している。この事實は、排除説を拡大し、補償説を否定せしめるに足るようである。しかしながら、一方に機械化が進行し、同時に、他方では産業預備軍が増大している事實はこれをみとめるとしても、それにもかかわらず、機械の導入が行われてから、就役労働者の数が増大している事實も、またこれをみとめなければならぬ。それは、さきにひいたパッシイの記述にも、思い半ばに過ぎるものがあるといつてよいであろう。そして、この後の事實は補償説の否定を否定する。そればかりではない。産業預備軍は職を求めて得ることのできない人口である。職を求めて得ることのできない人口は、かならずしも、機械のために職をうばわれた人にはかぎらない。そこで、機械が労働者の職をうばわず、いな、ふやしても、職を求める人口がそれ以上に増大すれば産業預備軍は増大する。しかし、それはかならずしも、機械のせいではない。それをもつて、ただちに、機械のせいに帰し、補償説を否定するところには論理の飛躍がみられねばならないであろう。ただし、機械の導入は生産を増大し、よつて、人口の増大を可能にする。機械は労働における熟練の必要を減じ、そのことは労働力の供給量を増大する。この二つのことは労働を求める人口を増大する。労働を求める人口が増大するから、したがって、労働を求めてこれを得ることのできないもの、すなわち、いうところの産業預備軍が増大する。そうすれば、結局、機械が産業預備軍をつくるということになる。そういえばそうである。しかし、ただそれだけのことである。そのことから、補償説が否定せられねばならぬ理由は出てこないであろう。

われわれはいま、たまたま、排除説論者が補償説を否定せんとするのをみた。しかし、相手方の説を否定せんとするのは排除説論者の側だけのことではない。補償説論者の側にも、あることをわすれてはならない。かれらもまた相手方の主張するところを、一時的、過渡的現象とみなすのである。さきに見たところのシャプタルの説は、も

ちろん、このみかたの上になつところのものである。しかし、シャプタルの説は、すでにしばしばふれたごとく、ことばの真実の意味における補償説ではない。だから、それよりして補償説が排除説を一時的・過渡的現象とみなすとは、かならずしも、いえないでもあらう。しかしながら、この論理は、しばしば、さらにつぎのごとく展開される。すなわち、機械は生産物を廉価にする。生産物が廉価になればそれに対する需要が増加する、そのことは、機械の導入せられた生産部面における生産の増大、したがって、また、雇用の増大をひきおこす——それはシャプタルの説の主張するところ——ばかりではない。さらにつぎの諸場合をみちびく。まづ、関連産業が発展する。それは雇用の増大を約束するであらう。つぎに、消費者の購買力に剰余を生じる。それは他の商品の購入にむかつて流れる。そこで、当該商品の需要が増加する。需要が増加すれば生産が増加する。生産の増加は雇用の増加をうながさずにはおかぬであらう。もっとも、この購買力の剰余はいつも他の商品の購買にむかつて流れるとはかぎらない。しかし、その場合、それは蓄積となる。この蓄積は資本の増加となる。資本の増加は究局において、生産の発展に貢献する。生産の発展は雇用の増大をうながさずにはやまないであらう。そしてそれらはいづれも、ことばの真実の意味において、補償説である。そしてこの場合、その雇用の増大と、機械の導入せられる生産部面における労働者の排除との間には時間的づれがあることをみとめないわけにはゆくまい。その時間的づれをみとめることは、やがて労働者の排除を一時的・過渡的現象とみることを意味するものでなければならぬであらう。そして、補償説のこの主張は、たしかに傾聴にあたいる。だが、しかしながら、一時的・過渡的現象といえば、補償説の主張するこの事象こそ、まさに、一時的・過渡的現象以外の何物でもないことにならねばならないとするみかたもなりたつ。けだし、補償説は、それがことばの真実の意味における補償説であるかぎり、はじめて新しい機械が導入せ

られた生産部面における労働者の排除を肯定するとともに、他の生産部面においてこれが補償がなりたつことを主張する。この場合、この補償がなりたつためには、この補償がなりたつとせられる「他の生産部面」には新しい機械が導入せられないことを前提とするものでなければならぬ。しかしながら、そこに新しい機械が導入せられないことの保証はない。保証がないどころではない。やがてはそこにも新しい機械が導入せられるであらう。いな、導入せられるにちがいない。それは時間の問題にすぎないといえよう。しかるに、そこに新しい機械が導入せられるとき、補償はなりたたなくなる。だから、補償のなりたつのは——したがって補償説は——一時的・過渡的現象でなければならぬということになる。げんにマルクスはつぎのごとくいつている。

ジェンニー、スロックスル、ミユールの三紡績機によって、たとえばイギリスに産み出された八十万の綿織物工が、結局再び蒸気織機によって滅ぼされるまでは、綿織物業に人間が流入した。かくして、機械によって生産される衣服材料が豊富になると共に、裁縫工、仕立女工、縫工等の数が、ミシンの出現するまで増加する。¹⁷⁾

それはこの理を実証するものにほかならない、といつてよからう。リカードやミルが排除説をまとめながら、なお、補償説を肯定したことは、すでにふれたところのごとくである。それは、かれらの、機械の導入が一時に、かつ、急激に実現しないことの認識による。だが、そのことは、機械の導入が一時に、急激に実現すれば補償説がなり立たぬことを意味せねばならない。したがって、かれらも、やはり、補償説をもって、一時的・過渡的現象とみるみかたと、相通ずるものをもつことを知らねばならないといえよう。いわんや、機械の改善発達が日進月歩の今日、今日におけるごとく、各方面にオートメーションの出現・普及化をみるとき、この主張のますます重きを

加えるをおぼえざるを得ないであろう。オートメーションの発達のいちじるしいアメリカではすでに、労働日数の減少をみる。労働日数の減少は、労働を量的にとらえるとき、労働者の解雇に相当するのではないか。

四

かくて、排除説と補償説は、あくまで、ちがった観点に立つ。二者は別々の論である。二者がいづれも、その立場をわきまえ、その限界を越えぬかぎり、いづれも正しい。いづれかの一方が他のいづれかの他方をおかそうとするとき、それらは謬りにおちいらねばならぬ。これをたとえば、排除説は、象の鼻は繩に似る、というごときものである。象の鼻に関するかぎり、それは正しい。謬りではない。何人もこれを否定し得ない。しかし、すすんで、これを象の全体におよぼすとき、それは謬りにおちいる。象の全体はけっして繩に似ていない。補償説は、たとえば――あまり適当なたとえではないかも知れぬが――月の輪熊の全体をみてこれを黒いというがごときものである。

月の輪熊を全体においてみれば黒いといってもよいであろう。何人もそれに異議をさしはさまうとはしないであろう。しかし、だからといって、すすんで、月の輪の部分までも黒いといえ、それは謬りである。それこそ白を黒といいくるめるものでなければならぬ。そして黒白の別は、いいくるめるべく、あまりにもあきらかであろう。

しかしながら、排除説を主張するものも補償説を支持するものも、いづれも、その限界にとどまるのに満足しない。すすんで、その限界を越えて、たがいに他を侵そうとする。それは、いまみたところのごとくである。そして、それは、せんじつめれば、おもうに、機械の導入せられるところにおいてあらわれる、労働者が排除せられるという現象と、その導入せられるところ以外においてみられる、労働者が吸収せられるという現象の、いづ

れが、より大であるか、ということ、また、この二つの現象のいづれを根本的・究局的なものともみ、いづれを一時的・過渡的なものとみるかにかかるといつてよからう。そして、ここにいたつては二者は同一の観点に立つ。完全に相反し、完全に対立する。まさに正面衝突である。もはや、兩立はゆるぎされない。一方が正しければ他方は謬りてなければならぬ。そして、排除説と補償説との対立相克は、本来、ここにこそ、その意味があり、その存在理由が存する。そして、その意味その存在理由は重要ならずとしない。いな、きわめて重要である。しからば、いづれが正しいか。いづれが謬りか。それに断を下すことは困難であり、危険をともなう。すくなくとも、現在の段階においては、なお、そうである。そのことは前述したところよりも理解するにたかくないであらう。ひとは、あるいは、いかにも知れない。現在、機械の性能の向上とその普及化の傾向には、きわめていちじるしいものがある、そのことは排除説に有利である、と。それは、たしかに、そのとおりであらう。しかしながら、それはつぎの二つのことを考慮の外において、はじめてなりたつことである。二つのことというのはほかでもない。一つは、機械の性能の向上が労働時間の短縮をきたす傾向、かならずしも、なしとせず、そして、労働時間の短縮は機械の労働者排除を緩和する、ということである。いま一つは、機械の普及化は一般的に低賃金をきたす潜在力であり、そして、一般的に低賃金は機械の採用を、したがって、その普及化を、阻止する潜在力であるということである。いま、この二つのことを考慮に入れるならば、はなしは、おのづから、ことならざるを得ないであらう。

- (1) Frédéric Passy, *Leçon D'économie Politique*, Paris, 1862, 2^e édition, Tome second, P. 212. M. Le Vre Alban de Villeneuve-Bargemont, *Économie Politique Chrétienne, ou Recherches sur la Nature et les Causes du Paupérisme en France et en Europe*, Bruxelles, 1837, p. 140. (2) Frédéric Passy, *Ibid.*, P. 212.
- (3) Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, Band I, 10. Auflage, Hambourg, 1922.

- (4) 小泉信三、共産主義の常識、頁、三三、五四、一〇五—一〇六、
- (5) J. L. Hammond and Barbara Hammond, The Skilled Labourer, 1760-1832; 2. edition, London, 1920, P. 56,
- (6) Dictionnaire du Commerce et de la Navigation.
- (7) Frédéric Passy, Ibid., pp. 218-219. (8) Ibid., pp. 214-215.
- (9)むしろ非排除説というべきであろう。それに、機械が導入せられた生産部門における労働者の排除を否定するものと、その他の生産部門における労働者の増加を指摘するものがある。ことばの真実の意味においては、補償説はこの最後のものであるとせねばならないとおもう。本文に後述するところを参照。
- (10)拙著、英國産業革命史の一断面—ラダイクの研究—、頁二五六—二六〇
なお、この点については、つぎにかかげるところを参照せよ。
Alban de Villeneuve-Bargemont, Ibid., pp. 134-139.
Daniel Bellet, La Machine et La Main-D'œuvre Humaine, Paris, 1912, pp. 146-192.
- (11) E. Levasseur, Histoire des Classes Ouvrières et de L'industrie en France de 1789 a 1870, Paris, 1903, p. 419.
- (12) Frédéric Bastiat, Oeuvres Complètes de Frédéric Bastiat, Tome Cinquième, Paris, 1854, p. 374. ("Ce qu'on voit et ce qu'on ne voit pas.")
- (13) Ibid., pp. 371-372. (14) 拙著、前掲、
- (15) D. Ricardo, On the Principles of Political Economy and Taxation, edited by E. C. K. Gonner, pp. 377-391
J. S. Mill, Principles of Political Economy, edited by W. J. Ashley, pp. 742-745
なお、リカードの機械論については大阪市立大学経済学部助教授、真実一男氏の詳細な研究『ベイトン、およびリカードの「機械論」について』（経営と経済、五八・五九・六〇号連載）参照。
- (16) Karl Marx, Ibid., SS. 406-411. (17) Ibid., S. 410.
- (本稿は、京都大学総合経済研究所における昭和三年度文部省科学研究費機關研究助成金による「資本蓄積の研究」中、歴史・学説史部門に属する研究の一端である)